

宇陀を駆けた人々

6 松浦武四郎 篇3

嘉永6年

時を遡る嘉永6年（1853）。この年の大きな出来事といえば、「黒船来航」。6月、ペリーが率いるアメリカ海軍の艦船（黒船）4隻が現在の神奈川県横浜賀市浦賀に来航しました。また、8月にはロシアの艦隊も長崎に来航し、開国を求めました。アメリカは、日本を中国との貿易船や捕鯨船の中継地とするため、日本に開国を求めたのでした。

武四郎は蝦夷地の調査を行うようになってから、幕末の数多くの志士との交流がありました。8月末日、武四郎は志士たちから重要な任務を頼まれます。攘夷（じょうい）／外国を撃退し、鎖国を続けようとする（こと）の宣下（せんげ）／天皇の命令を伝える公文書）が出されるように働きかけることを求める密書（秘密の手紙）を朝廷に届けることでした。10月2日、江戸から京都へと向かいました。25日には京都での任務を終え、28日は江戸への帰途につきました。

翌29日は、桜井、初瀬を経て、萩原から伊勢本街道を通って伊勢神宮へと

向かう途中、上田口（田口元上田口）の「布袋屋（ほていや）」という旅籠に泊まっています。武四郎が泊まった旅籠は残っていませんが、この跡地には、「北海道の名付け親 松浦武四郎 嘉永6年10月29日 宿泊布袋屋跡」と書かれた案内板が建てられています。

上田口村は、伊勢本街道の宿場のひとつで、かつては多くの旅籠が建ちなれば、従来する旅人で賑わいました。ここに残る旧飯岡家住宅（国登録文化財）は、上田口村の庄屋をつとめたと伝えられ、紀州藩主が伊勢参詣の際にここを利用したといわれています。

武四郎が残した資料のうち、1505点が重要文化財に指定され、「松浦武四郎資料館」（松阪市小野江町）で収蔵・展示が行われています。「松浦武四郎誕生地」とあわせて、ご覧ください。



文・柳澤一宏（文化財課）

人権コーナー

人生100年（876,000時間）を

どう生きるか

医療や福祉などの進歩充実により、私たちの寿命が年々伸びています。2017年現在、満100歳以上の人は、日本で67,824人（2017年9月1日現在 厚生労働省）おられます。やがては多くの人が、100年（876,000時間）を生きるだろうといわれています。人生100年の生き方に関する本も、いろいろ出版され、注目されています。

場で活躍されている高齢の人たちも数多くがんばっておられます。

私たちは、高齢といわれる年齢になっても、人生設計をきちんと立て、豊富な時間をどのように使っていくのかを真剣に考えるべき時期を迎えているといえるでしょう。自らの人生に目的をもち、満足できるものにしたいものです。

しかし一方で、健康問題の悩みや孤独な環境におかれていること、高齢者に対する虐待、介護の問題など、解決しなければならぬ問題が多く存在しています。人生100年を安心して生き抜くための条件づくりや人権を大切にしたい社会をつくっていくことが一層求められています。

私たちは、高齢といわれる年齢になっても、人生設計をきちんと立て、豊富な時間をどのように使っていくのかを真剣に考えるべき時期を迎えているといえるでしょう。自らの人生に目的をもち、満足できるものにしたいものです。

例えばあなたは、どのようにこの長い時間を有効に使いますか。働くこと、趣味を伸ばすこと、ボランティア活動にかかわること、みんなが暮らしやすいまちづくりにかかわること、など人それぞれに考えることができるでしょう。近年は、豊富な経験や知識を生かして、いろいろな

